

## 男性とスカート考 (1)

### Men and Skirts 1

北方 晴子

Haruko Kitakata

#### 要旨

昨今、「スカート男子」という言葉が聞かれるように、モードに関心の強い若い男性の間ではスカートを履く姿も見ることが出来る。かつて女性専用の衣装と考えられていたスカートが、今なぜ男性に広がりつつあるのだろうか。

本研究ノートでは、かつての「男がズボン、女はスカート」の定説がいつごろ誕生し、定着していったのか整理した。そして、服飾史の中でも特異な現象である17世紀の男性用のスカート風半ズボンの流行、その後のフランス革命直後に現れた男性用チュニックを取り上げた。また、イギリスでは19世紀後半、男性衣装に関する改革が試みられた。そして20世紀初頭、組織団体メンズドレスリフォームパーティが設立され、長ズボンを排除し、スカート風ズボンを推し進めようとした。一方で、19世紀はヨーロッパで民族衣装が再認識された時期でもある。自然回帰、異国趣味、地方趣味、素朴さへの愛好などを重んじるロマン主義時代、作家や芸術家は民衆の生活に注意を向け始めた。東西ヨーロッパ遠隔地や一部では原初的な形としてチュニック形式の男性民族衣装があった。そこで本研究ノートでは歴史にみる男性用スカートとスカート風民族衣装について整理をし、現代男性とスカートについての論考に繋げる足がかりとしたい。

●キーワード：メンズファッション (men's fashion)/ スカート (skirt)/ 服飾史 (fashion history)

#### はじめに

2000年代以降には、コレクションにも男性モデルがスカートをはいたショーが披露されている。ヨウジヤマモト Yohji Yamamoto<sup>1)</sup> は、2013-14年秋冬メンズコレクションで、労働服やつなぎといった男性的な日常着に加えて、女性的なスカートを提案した。男性服におけるボトムスのあり方にアプローチしたコレクションを披露した。トム・ブラウン THOM BROWNE<sup>2)</sup> 2018年パリメンズ春夏コレクションでは、多数の男性モデルがスカートをはき、全員がハイヒールを履いて登場した。これまでもジェンダーレスファッションは度々コレクションに登場してきいたが、ジェンダーの隔たりを大幅に超えたコレクションと言える。そこには、「何故、スカートは女性だけのものなのか」「何故、ハイヒールは女性だけのものなのか」など、当たり前のように社会の中で決められたファッションの規範へ問いかけた。このショーではプリーツが多様され、シャツワンピース、ショート、ロングなど様々なシルエットのスカートが登場した。ラストルックには、前からみると男性用タキ

シード姿、後ろから見るとウェディングドレス姿というコレクションの最も象徴的なジェンダーレスな服が登場した。まさに、男性ファッションと女性ファッションが融合したコレクションであった。

他方、2017年6月、イギリスで校則に反抗してスカートをはいて登校した男子生徒たちが、BBC放送やインターネットで話題になった。原因は、温暖化による猛暑と関係している。暑い夏でも長ズボンを履かなければいけないとする校則に抗議して、スカートを履いて登校した男子生徒たちに対し、中学校は彼らの主張を一部聞き入れ、次年度の夏から半ズボンで授業を受けてもよいことになった。男子生徒たちは、当初、猛暑に耐えかね、半ズボンを履きたいと学校側に訴えたが、校則を理由に却下されたため、女子生徒はスカートをはいて脚を出せるのに、なぜ男子生徒は半ズボンを履けないのかと反論したところ、学校側にスカートだったら、はいてもよいと言われたことに反発し、翌日男子生徒たちは、友人や姉妹に借りた制服のスカートを着用して登校したというものである。

## I 「男はズボン 女はスカート」説

スカート skirt の定義としては、ドレスやコートのウエストより下に垂れる部分を指している。語源は、シャツを意味するスカンジナビア古語の skyrt, skyrta が語源である<sup>3)</sup>。

古代のシュメール、バビロニア、アッシリアなど古代オリエント諸国の男性はカウナケス kaunakes<sup>4)</sup> と呼ばれるウールの長い巻衣を着用していた。そして、古代エジプトの男性もシェンティ shenti、パーニュ pagne<sup>5)</sup> と呼ばれる腰衣は、すべていわゆるスカートであった。それらは古代エジプトの男性にとっては伝統的な盛装であった。新王国時代になっても巻衣であるカラシリス kalasiris<sup>6)</sup> を着用し始めてからも、儀式における正装はスカートであった。

他方、古代ギリシア・ローマ時代の軍人や青年は、膝丈のキトン chiton やトゥニカ tunica を着用していた。それらはスカートの形を形成していた。こうした装いは当時の壺絵や浮き彫りなどに頻繁に登場している。

男はズボン、女はスカートという定立はいつ、どのように誕生したのだろうか。ヨーロッパにおいて、スカートとズボンという性差の分離は、中世以後である。だが、ゲルマン社会では、男はズボン、女はスカートという性差があったことは既に明確である。それは、タキトゥスの『ゲルマニア』<sup>7)</sup> の記述によって明白である。このゲルマン社会で見られた衣服における性差は、やがてローマ末期のキリスト教文化を経て、ビザンチンに受け継がれ、女性は床丈のチュニック、男性は膝丈のチュニックにタイト状のホーズを穿いている。その姿は、イタリア北東部のラヴェンナにある有名なサン・ヴィタレ教会のモザイク画で明らかである。

その後、ロマネスク期に入ると、男女ともにプリオーbliaud<sup>8)</sup> と呼ばれる緩やかで床丈のワンピース形式の衣服を着用していた。その後、コット cotte<sup>9)</sup> となる。衣服における性差は概してないと言える。14世紀後半には、コットはコタルディ cothardi<sup>10)</sup> に変形し、男性の上衣は膝丈になる。そして15世紀ゴシック期には、男性に短い上着ブルボワン pourpoint<sup>11)</sup> が登場する。すなわち、それまでのチュニック形式のものが、太ももから腰丈へと短くなり、脚衣としてショース chausse<sup>12)</sup> が現れる。一方の女性には女性専用の衣服ローブ robe<sup>13)</sup> が登場する。そのようなスカート形式の衣服はビザンチンからロマネスク期、すなわち9世紀から14世紀中頃まで認められる。そして、ゴシック期からルネサンス期にか

けてファッションにおける性差が強調されるにつれて、男性はズボン姿、女性はスカート姿であることは確立し、以後それが昨今まで観念として定着した。

こうして、完全に男女の衣服が分離をする。以後、「男はズボン、女はスカート」という定立が20世紀半ばまで続くのである。すなわち、スカートが女性の象徴、ズボンが男性の象徴とする近年までの概念は、ヨーロッパも服飾史における中世の慣習に基づいたものであることが分かる。

## II スカート風半ズボンの流行

17世紀半ば、独特の脚衣が流行した。それはバロック期を特徴づけたラングラヴ rhingraves<sup>14)</sup> と呼ばれるものであった。この服飾名称は、当時の神聖ローマ帝国のライン伯爵によってパリに持ち込まれたという説から、はじめはドイツのライン地方 rhein 伯爵 graf のズボンと呼ばれたことに起因し、フランス語でラングラヴとなった。もとは、フランドル地方の、ダブダブのだぶだぶのズボンがドイツを経由しフランスに伝えた。石山によると、初見は1640年頃である<sup>15)</sup>。イギリスでは、ペティコート・ブリーチズ petticoat breeches と呼んだ。文字通り、スカートズボンということである。特徴はウエストや裾についたリボン飾りである。膝下にはキャニオンズ canons<sup>16)</sup> と呼ばれたレースをふんだんに施したものを穿いた。スカート風半ズボン以外にも、当時の男性は、頭には長い巻き毛のカツラ、全身にリボンやレースを施し、足元はヒール靴という装いで、女性以上に着飾っていた。当時、こうした姿をした男性をギャラント galante<sup>17)</sup> と呼んだ。



図1 1660年代 フランス宮廷人が穿くラングラヴ

なぜ、こうした半ズボンが流行した背景には、当時の芸術様式バロックスタイルが影響した。経済的に発展した17世紀は膨大な富がヨーロッパ全体に蓄積され、台頭しつつある市民文化と融合し、豊かな経済環境が服飾にも影響した。中世的な服装の枠組みが崩れ、近代的な衣装への過渡期であったと考えられる。そうして、奇抜さを求めて極端さに走る変化が見られた。そうした時代の文化は国王への偉大さを強調し、バロック様式として花開いた。豪華で権力を誇示的な装飾趣味をもつようになった。装飾によって強力な絶対王政を美化し、誇示していった。服飾には、そうした風変わりな華やかな装飾が用いられ、特に男性服においては17世紀中ごろ、装飾を重視し、レースやリボンを用いたスカート風ズボンが流行した。

このラングラージュは、1780年代になると、半ズボン culotte に置き換わった。

### Ⅲ フランス革命期の男性用国民服とチュニック

18世紀末期のフランス革命は社会に大きな変革をもたらしただけでなく、服装にも大きな影響を与えた。革命によって、身分上の平等を確立したことによって、衣服に関しても庶民に対し服装上の奢侈禁令もなくなり、身分差が消滅した。すなわち、服装上においても自由・平等となった。革命が起こった直後の王政時代には、フランス貴族や宮廷の社交生活が停止したために、それまでのモードは停滞した形となった。男性の服装は全体的に固定化され、先代のフロックコートやキュロット、ベストという装いが続いた。続く共和政時代に入ると、サン・キュロット sans-culotte<sup>18)</sup> と呼ばれた革命推



図2 1794年 J-ダヴィッドのデザインによる国民服

進派はカルマニョール *carmagnole* と呼ばれた腰丈の長い上着と踝までの長ズボンを組み合わせた。服装史上では、これこそ男性が初めて長ズボンを穿いたときで、それは今日の背広服の上下とさほど変わらない形であり、背広服の原型と言われているものである。

この時期に、共和政府が国民服の制定を試みた。そこには、自由・平等という市民の理想像としてこの時期に理想とされていた古代が手本とされた。画家ダヴィッド Jacques-Louis David (1748-1825)<sup>19)</sup> は政府の命令を受けて、腰にサッシュを巻いたチュニックスタイルに足をぴったり覆う長ズボンを発表した。それこそ、古代の男性衣装を手本にしたものであった。しかしながら、この古代趣味は女性服においては普及していったが、肝心の男性には見向きもされずに終息した。

### Ⅳ メンズドレスフォームパーティと新男性衣装デザイン

1929年、イギリスでメンズドレスリフォームパーティ MEN'S DRESS REFORM PARTY (通称 MDRP) なる団体が設立された。メンバーには、イギリスの聖職者、医者、芸術家、学者などが参加し、世界中に支部も後に設立された。伝統的なメンズスーツが成立した国で、20世紀初頭という大変早い時期に長ズボンを排除しようとした試みには驚かされる。

メンズファッションの進歩向上を図ることを目的としたこの団体は、「暑い夏は、非合理的な長ズボンの着用を辞め、もっと通気性が良くて衛生的、しかも見た目にも良いものを作ろう」というキャンペーンを行った。通気性や衛生面を重視していることから読み取れるように、彼らの関心事は、男性服におけるデザイン的な要素よりも、身体的なことであったと考えられる。

イギリスでは19世紀後半から様々なドレス改革運動が起こっていた。特に、女性服においては、動作に支障が出るほど重々しい衣装を身に付けることでの女性の社会的な地位の低下に対する懸念や、特にコルセットで女性の身体を拘束することへの医学的な懸念があった。少しずつゆるやかな衣装への関心が高まっていくこととなる。こうして服装改革を推進する気運のもと、相次いで組織的な服装改革運動が起こっており、合理服協会(レイシヨナルドレス協会)の設立<sup>20)</sup>である。これらは男性服を中心にしたものではなかった。しかし、合理服協会にはオスカー・ワイルド Oscar Wilde (1854-1900)<sup>21)</sup>も加わり、あまりに単調になってしまった時の男性服に異議を唱えた。男性服も美的要素を追求し個性をみせる

ことを目的とし、彼は18世紀の男性服を彷彿させるようなベルベット上着に膝丈のキュロット、色鮮やかなネクタイ、シルクの靴下という華美な装いを推進し、自らも着用していた。しかしながら、一般には広がらなかった。当時のイギリスでは美学運動が起こり、男性服にも女性服にも美的な要素を持ち込もうとしていた。こうした服装改革は当時、下着にも及んでいる<sup>22)</sup>。そして服装改革の波は、子供服にも及び、1870年代の半ば、少女の健康に関する注目が集まった<sup>23)</sup>。

マクネイル Peter McNeil は、著書の中で、MDRP は、当時のフェミニズムの脅威への恐れであったことを指摘する<sup>24)</sup>。女性の社会進出が進み始めた1920年代、新たな男性像を模索していた現れなのかもしれない。

また、MDRP は、最優先事項として、「ズボンを廃止し、ブリーチズやキルトを推進」した<sup>25)</sup>。事実、会員らは、一見するとキュロットスカートを思わせるゆとりのある膝丈のパンツにシャツやハイソックスを合わせた。マクネイルによると、1927年に出版された「新しい健康」の中で、「全てのイギリス男子は最も衛生的で、健康的な衣服であるキルトを着用すべきである」と提唱している<sup>26)</sup>。

イギリスの芸術家エリック・ギル Eric Gill (1882-1940) は MDRP をサポートし、男性にスカートを推奨している。1931年の著作『衣裳論ズボンとスカート』の中で、「スカートは別に婦人専用に出てくるものではありませんし、ズボンにもしたって決して男子だけのためのものではありません。スコットランド人がキルトを穿いていたためにかつて弱弱しかったのでしょうか、トルコの女性がズボンのようなものを穿いているからといって過度に男じみているのでしょうか、インド人がズボンもスカートも穿かないからといってあの国には性別がないのでしょうか」と述べ、両方の性がスカートとズボンをはくべきであると主張している<sup>27)</sup>。

その後、第2次世界大戦が近づくと勢いを失っていった。1937年に解散を余儀なくされた。

## VI スカート風男性民族衣装

女性服の象徴はスカート、男性服の象徴はズボンという近年までの概念が、中世ヨーロッパの歴史性に基づくものではあったが、それは決して絶対的なものではない。ヨーロッパの衣服の中にも、判例が見られるのも事実である。それは、民族服である。

民族服は、ある時代の衣装がなんらかの理由でその地

域に停滞し温存してきたものである。したがって、歴史服と民族服は、大変深い関係にある。

民族服における男性のスカートの典型的な例は、スコットランドのキルト kilt であろう。スコットランド特産の毛織物で、単純な縞、または格子柄の織物はタータンとして知られる。古くからケルト人の織り柄として古くから継承されてきたタータンはクラン（氏族）を明確にするためにこの格子柄の毛織物を使用していたのである。元来は長方形のウール地（約90センチ×500センチ）を身体にショールのように上半身にも布地の一部を巻きつけていた。戦争時には柄で敵か味方かを識別していた。18世紀半ばには、イングランドによってタータン着用が禁止された。しかし、1780年禁止令が解かれると、スカートの形で普及していった。来やすい服を求める実用性からの工夫と考えられる。キルトを描いた視覚資料はこの時期のものが多い。

また、ヨーロッパの遠隔地であるスカンジナビア半島の北部のロシアのコラ半島、スウェーデン、フィンランドにまたがる地域の北極圏内にはラップランド人が定住している。ラップ人の男性民族衣装は裾にフリルを伴った緩やかなワンピース形式である。この服型は原初的な形の典型と考えられている。

次に、東欧ハンガリーに見られる男性用のスカート状ズボンがある。ハンガリーの大平原（ハンガリー東南部）に位置するブダペシュトに続くハンガリー第二の都市デブレツェン Debrecen 周辺では、牧夫たちが幅の広いゆるやかなふくらはぎ丈のスカート状ズボンを穿く。この辺りは、牧畜が中心で、牧夫が着るものとして古くから知られる。ハンガリー独自のもので一般的にガチャ gatya と呼ばれ、ズボンと同じように袖口の広いシャツに合わせて着用される。もともとは家庭で制作されるか、専門の職人に自家製のリネンや麻布で仕立てられた。布の無駄を避けるために、全て直線立ちである。かつては、晴れ着として発展したものだが、近代化でこの風景が変わっていったが、現代に入ってから昔の衣装が祭り着として再現される。時代とともに裾は幅広になり、裾にギャザーや刺繍を施し誇張され、裾がポイント化していった。

同じく、ゆったりとしたスカート風長ズボンはルーマニア西部のパナート Banat にも見られる。そして、ルーマニア北部の観光地としても有名なブコヴィーナ Bucovina では、細見のズボンの上から、膝丈のチュニックを着るので、下半身はスカート状である。

東ヨーロッパには、男性にチュニック風の民族衣装がこの他の地域にも見られる。例えば、ポーランド全土でも最も美しい代表的な民族衣装と言われるクラクフの男性民族衣装は、丈の長いコートを着用する。民族舞踊では、男性の丈の長いコートがまるでスカートのように広がるのが魅力となっている。

南欧アルバニアやギリシアの民族服にも男性のスカート状の服が見られる。フスタネラ fustanella は、バルカン半島諸国の男性が着用する伝統的なスカート型の下衣である。同型の衣装は、シリアからルーマニアにかけて広く存在している。オスマン帝国の支配下では、フスタネラは山賊とその対策部隊のアルマトロイ armatoloi が着用していた。独立の気運が高まる18世紀から19世紀初頭、フスタネラは民族全体の象徴とされるようになる。このころのものは、まだ膝下丈で裾はガーターと共にブーツにたくし込まれていた。ギリシア王国時代、スカートは膝上丈まで短くなり、靴下型のタイツと、編み上げブーツかポンポンを飾った靴を合わせるようになった。

現代では、フスタネラは主にギリシアのアテネ周辺の宮殿の護衛兵エヴゾネス evzones、アルバニアの親衛隊のユニフォームにもなっている。民族服であったのを、19世紀になってから制服として取り入れたものである。そして、アルバニア、ギリシアの民族舞踊の衣装の一部として残っている。

また、東南アジア諸国の男性も儀礼服としては、いわゆるサロン形式のものが見られる。地域差はあるものの、インドシナ半島からインドネシアまで広く分布している。

このように、民族服の中に存在する男性のスカートは、いずれも歴史的、あるいは風土的な環境の中で成立し、今日に至っている。

## むすび

かつての「男がズボン、女はスカート」の定説がいつごろ誕生し、定着していったのか整理し、そして、服飾史の中でも特異な現象として17世紀に登場した男性用のスカート風半ズボンの流行、その後の18世紀末期フランス革命直後に現れた男性用チュニックを取り上げた。

その後、イギリスでは19世紀後半、美学運動とともに、幾度となく男性衣装に関する改革の波が訪れた。そして20世紀に入ると、組織団体メンズドレスリフォー

ムパーティが設立し、長ズボンを排除し、スカート風ズボンを推し進めようとした彼らの目的について、19世紀の男性衣装改革との違いについて考察した。

19世紀後半は、男性服のみならず、女性服への改革団体があった。それは一部の社会的、医学的懸念を伴いながらであった。しかし、MDRPの衣服改革はそれまでの衣装改革とは異なり、フェミニズムの脅威であったとマクネイルは指摘する<sup>29)</sup>。事実、20世紀に入ると、イタリアやロシアなのでも前衛芸術家たちが、男性衣装改革を試みていた。その背景には、ファシスト化していくヨーロッパの流れに組み込まれ、強い男らしさが求められ、新しい男らしさを模索していた時期と重なっている。

一方で、19世紀はヨーロッパで民族衣装が再認識された時期でもある。自然への回帰、異国趣味、地方趣味、素朴さへの愛好などを重んじるロマン主義時代によって、作家や芸術家たちによって民衆の生活に注意を向け始めた時でもある。民族衣装の維持、保存を助長する人々により着用の復活があった。中でも東西ヨーロッパ遠隔地、一部東ヨーロッパでは原初的な形としてのチュニック形式の男性民族衣装があった。

今回は、1960年代から現代における男性とスカートについて考え、現代の男性とスカートについての論考に繋げる足がかりとしたい。

## 注

- 1) 1981年、パリでコレクションを発表すると、「黒の衝撃」と言われ、ファッション界にジャパンショックを引き起こした。服は平面的で、性を問わない、日本的な発想を見せ、新しい女性服の美を打ち立てた。今までにない前衛的な服作りは、世界中に大きな影響を与えている。
- 2) トム ブラウン THOM BROWNE. 1965年アメリカ、ペンシルバニア生まれのデザイナー、トム・ブラウンによって2001年にトム ブラウン ニューヨーク THOM BROWNE NEW YORK が設立された。2017年秋冬シーズンにトム・ブラウン THOM BROWNE にブランド名が変更された。ニューヨークを拠点とする。独特のシルエットやデザインで知られる。
- 3) スカート skirt の語源は、シャツを意味する古代スカンジナビア語、あるいはノルウェー古語の skyrt,skyrta で、英古語では scyrte、中世に入ると sherte が使われたとされる。つまり、スカートはシャツの延長線上にあることが分かる。
- 4) カナケウス kaunakes 古代オリエント諸国にみられる毛足の長い巻衣。後に、農牧夫や宗教服、東欧の民族服などに影響した。
- 5) パーニュ pagne フランス語で腰衣の総称である一方、狭義には股をくぐらせてから腰部を覆う腰衣を指す。典型は、古代エジプト男子のそれにみられる。これに対し、巻きスカート型のものをフランス語でシャンティ shenti として区別

- することがある。英語では loincloth。ドイツ語で schurz。
- 6) カラシリス kalasiris 主に新王国時代以後の男女が着用した巻衣。
  - 7) 『ゲルマニア』は、ローマの歴史家タキトゥスが、ゲルマニア地方の風土、住民の慣習・性質などについて記述した書物。紀元98年作。古代ローマ帝国の外縁に住むゲルマン人について、ローマ人と比べるとゲルマニア人の性質を「高貴な野蛮人」だという見方で伝えた。服飾史においては、この書物によってゲルマン人の装いは「男も女もチュニック」スタイルであったことが分かっている。
  - 8) ブリオーbliaud 11世紀から13世紀ごろまでに男女に広く着用されたチュニック形式の衣装。
  - 9) コット cotte 13世紀から15世紀ごろまで男女に広く着用されたチュニック形式の衣服。
  - 10) コタルディ cothardi 13世紀から15世紀頃、男女に着用された衣服。この言葉は、コットに大胆なという意味で、名前の通り、コットに装飾を加えた衣服。
  - 11) プルポワン pourpoint 14世紀から17世紀半ばまで着用された男性の上衣。キルティングされた布地が特徴で、この言葉の語源にもなっている。もとは軍人が鎧の下に着用していたものが、一般に広がった。
  - 12) ショース chausse 腰から足の部分を覆う脚衣。13世紀から14世紀にかけて着用され、現在のタイツのようなもの。
  - 13) ローブ robe 現在のドレスに当たる。15世紀頃、女性専用の衣服として登場した。
  - 14) ラングラーヴ rhingraves 17世紀中ごろ、洒落者の男性が着用したスカート状の華美な下衣。ルイ14世時代のバロック様式を特徴とした過剰装飾が見られる衣服の一つ。
  - 15) 石山 彰、「男のスカート」、『SOEN EYE 23号』、文化学園ファッション情報センター、1996、p.50
  - 16) キャニオンズ canons 17世紀に、ラングラーヴの裾と長靴下との間につけられた装飾り。
  - 17) ギャラント galante 1750年代から1770年代頃に流行した音楽様式のことであるが、服飾では当時のお洒落な男たちを指した。
  - 18) サン・キュロット san-sculotte フランス革命時の革命党員。それまで貴族たちが穿いていた膝丈キュロットの代わりに長ズボンを革命派のシンボルとして着用し、このように呼ばれるようになった。
  - 19) ジャック＝ルイ・ダヴィッド Jacques-Louis David (1748-1825) は、フランスの新古典主義の画家。18世紀後半から19世紀前半にかけて、フランス史の激動期に活躍した、新古典主義を代表する画家。ロココ絵画の大家フランソワ・ブーシェはダヴィッドの親戚(母の従兄弟)。フランス革命期にはジャコバン党員として政治にも関与していた。
  - 20) レイショナルドレス協会 1881年設立。機能的なファッションの推進を目的として設立された。健康が損なわれるようなファッションに抵抗し、ゆったりとしたトルコ風ズボンを着用推進した。1890年解散。
  - 21) オスカー・ワイルド Oscar Wilde (1854-1900) は、アイ

- ルランド出身の詩人、作家、劇作家。耽美的・退廃的・懐疑的だった19世紀末文学の代表者。多彩な文筆活動をしたが、男色を咎められて収監され、出獄後に没した。
- 22) 美的運動、エステティック運動。1870年代半ばから1890年代にイギリスで起こった。美的なものに最高の価値を置き、美の創造を目的とした運動。耽美主義、唯美主義とも言われる。オスカー・ワイルドはその代表者となった。女性服においては当時主流であった細いウエストを豊かなバストというスタイルではなく、ゆったりとした衣服が見られ、自然な美しさを重視したものだ。こうしたドレスは、エステティックドレスと名付けられ、芸術を愛好する女性たちに注目され、少しずつ普及していくこととなる。
- この他イエガー博士により1870年にドイツで「健康下着」に関する論文を発表され、植物性繊維ではなく動物性繊維であるウール下着の着用をすべきと提唱し、推進した。当時、ドイツに滞在していたイギリス人商人がその考えに心酔し、帰国後ロンドンに「イエガー商会」を組織し、イギリスでのウール下着ブームを引き起こした。その後、イエガーはイギリスに定着し、現在のプティック「イエガー」へと成長し、日本でも知られる。
- 23) 1870年代、女子教育が義務化され、女子校が次々と創設された。当時の健康への関心の高まりを背景に、学校におけるスポーツが推奨されていった。スポーツに相応しい身体を拘束しない服が普及しはじめた。その頃、子供服の流行の先駆けになったのが、当時のイギリスの人気絵本作家ケイト・グリナウェイである。ウエストを締め付けないゆったりした可愛らしい服を着た子供のイラストをもとに子供服が登場した。
  - 24) Andrew Bolton, Bravehearts/ *Men in skiets*, V&A Publications, Lond., 2003, p.14
  - 25) *ibid.*, p.14
  - 26) *ibid.*, p.14
  - 27) *ibid.*, p.14

#### 参考文献・図版出典

- ・石山 彰、「男のスカート」、『SOEN EYE 23号』、文化学園ファッション情報センター、1996
- ・エリック・ギル、増野正衛訳、『衣裳論』、創元社、1952
- ・北方 晴子「20世紀メンズファッションと男性イメージ」『ファッションビジネス学会誌』、Vo 21、2016
- ・キャリー・ブラックマン、桜井真砂美訳『メンズウエア100年史』ブルースインターアクションズ、2010
- ・ジェームス・スノードン、石山 彰訳、『ヨーロッパの民族衣装』、文化出版局、2001
- ・花森安治、『花森安治集 衣裳・きもの篇』、LLP ブックエンド、2012
- ・Andrew Bolton, Bravehearts, *Men in skiets*, V&A Publications, Lond., 2003
- ・Peter McNeil and Vicki Karaminas, *MEN'S READER*, N.Y., 2009